1442

15. 脐帯ヘルニア治療上の問題点
川中武司，和田知久，大沢和憲
(金沢医科大学 小児外科)
7年5ヶ月間に金沢医科大学小児外科において，21例の脐帯ヘルニアと4例のガストロスキルージを経験した。われわれは出来るだけ新生児期に一期的除垂術を行う方針で治療を行い，一期的除垂の困難な症例に対してはskin flapによる除垂ヘルニア作製を新生児期に行っ
た。この場合二次形成術（除垂ヘルニア根治術）が治療上問題となってくるが，術式的工夫により良い成績をあげることができた。マーチロ療法の治療成績は不良であったが除垂上手技に問題があったのでは1例のみで，他の死亡例は患児自体が予後増悪因子を保有していた症例であった。全体としては脐帯ヘルニア21例中15例，ガストロスキルージス4例中3例を救命することができる。

16. 卵巣 Dysgerminoma の2例
新本修一，森田信人，山崎信
(福井県立病院 外科)
春木伸一
(同 小児科)
伊藤文雄
(同 娣人科)
小西三男
(金沢医科大学 病理)
小児悪性腫瘍の中でも，比較的稀とされる卵巣Dysgerminoma 2例を経験した。2例とも10歳時に下腹部腫瘤にて発症，Stage Ia で仮性卵巣管腫切除術施行，術後病理診断はpure Dysgerminomaであった。放射線療法施行せず経過観察中であるが，2例とも再発の所見はない。

さらに当院における，過去10年間の小児卵巢腫瘍を提
示した。卵巢腫瘍では，大人に比し悪性が多く，特に肉
実性の卵巢腫瘍ではGermall originの悪性腫瘍が高頻度であった。

17. 水腎症の治療
中村祐二，和田知久，土屋博之，中村豊一郎
(金沢医科大学 小児外科)
過去7年間で13例の水腎症の手術を経験した。症例の年齢および性別頻度は11例が乳児で1例だけが女児であった。我々の施行った手術方式はAnderson-Hynes法7例，Simple implantation 2例，Y-Y plasty 1例，politan eedcter 1例，一期的nephrectomy 3例であった。

最近我々は，一期的に吻合出来るようにつつめmicro-surgeryの応用をしている。micro-surgeryの使用により良好な結果を得たので今後も使用する方針である。

第17回日本小児外科学会長崎地方会

日時：昭和57年3月20日（土）午後1時30分
場所：長崎大学医学部付属病院臨床大講義室
幹事：土屋凉一

1. 膀胱混合性肉腫の1例
今村原志，城代明仁，下前英司，南○三
清原克夫，小川博寛，山下史史，松崎幸康
山田潤，森下真志，林 忍治，由良正道
岩崎昌太郎，草場泰之，金武洋，進藤和彦
斎藤 泰
(長大 混器科)

症例：1歳4か月の女児，主訴：尿混濁，排尿困難。
現病歴：昭和55年11月頃尿混濁，排尿時の全身力の排尿困難があり近医受診，DIP，膀胱造影にて膀胱底部の陰影欠損を指摘され，昭和55年12月5日長大泌尿器科入院，膀胱鏡的に膀胱底部の8時から12時かけて広基性，充実性，表面平滑状の腫瘍があり，昭和56年1月7日膀胱全摘，両側尿管皮膚膀胱術施行，電顕学的検索にて核紺筋組織が認められ，Rhabdomyosarcoma，embryonal typeの病理診断を得る。術後Actinomycin D，Vincristineの化学療法を開始し，3ヶ月終了した現在でも再発の徵候なく経過している。

2. 両側ウィルムス腫瘍について
柴田隆一郎，下田寛代，加藤 敦，大崎 隆
谷口英樹，伊藤正彦，田代 光，富田正雄
(長崎大学第1外科)

教室において経験した，1歳女児両側ウィルムス腫瘍
の1例は，腹部腫瘤にて発見され術前診断として，腹部
CT，動脈造影が有用であった。治療は，Actinomycin